

レーザーコンパス

研究発表の場

末田 正*

Tadasi SUETA*

最近、研究発表会の司会をする機会が多い。その折り折りに感じたことを二、三申し述べてみたい。

まず気付くことは、若い人を中心にしておう盛な発表意欲のあることである。本学会をはじめ種々の学協会の年次大会や研究会などにおける発表件数は、レーザーと光エレクトロニクスの分野で年間数百件に達するであろう。これは、この分野における研究開発の足どりの確かさを示すものとして喜ばしいことであり、又、これらの研究発表の中に、世界でも最高水準のものがかかなりみられることは頼もしい限りである。しかし、一つの問題点は、論文総数があまりにも多いため、これらの優れた研究成果が正当な評価を受けているかどうかである。

望ましい研究発表の場は、優れた内容の研究成果が報告され、活発で意味のある討論が行われ、そして正しい評価のえられる所であろう。現状では、発表論文の数（あるいは量）は十分といえるが、討論と評価に関してはどうだろうか。発表論文と共に、研究会の開催回数も多くなった結果、出席者の大半は若い人達となり、

直接関連した事柄に関する質疑応答はさかんに行われても、一段広い立場から討論し、その論文の値打ちを評価できる中堅の研究者の出席がなくなってきているように思われる。

もう一つの問題点は、年間数百編にも上る論文が、いくつかのテーマに集中していることである。本年4月フェニックス市で開かれた第2回CLEO（レーザー・光エレクトロニクス会議）に出席して感じたことは、発表論文がまことに多岐の部門に分れていることであった。光ファイバ通信の例にもみられるように、特定の部門に関しては、わが国からの寄与は量もかなりあり質においては他を抑えているといえる。しかし、それらはいくつかのピークに過ぎないのではないかと思われる。本年は、伝統あるIQEC（量子エレクトロニクス国際会議）がヨーロッパで開催されたが、本会誌前号のコンファレンスレポートによると、「わが国からの発表論文は全体の2%に過ぎなくて残念であった」と記されている。これに対し、この9月、同じヨーロッパで開かれたECOD（ヨーロッパ光通信会議）では、発表論文の18%はわが国からの水準の高

* 大阪大学基礎工学部電気工学科（〒560 豊中市待兼山町1-1）

* Department of Electrical Engineering, Faculty of Engineering Science, Osaka University
(1-1 Machikaneyama-Cho, Toyonaka-Shi, Osaka 560)

い寄与であった。いずれにしても、わが国のレーザー及び光エレクトロニクス分野における研究者数及び年間発表回数はかなりの数になっているが、特定部門への集中化がはげしく、全般的にみると「抜けている部分」が目立つのではないと思われる。

CLEOやIQECのような会合は、マンモス化してつかみどころが無いようでもあるが、この分野全般にわたる研究動向を感じるには有益である。とくに、第一線級の研究者が集って討論や意見交換を行うことによって、優れた研究成果が正当な評価を受ける機会に恵まれるであろ

う。国内においては、切角の研究発表が、種々の学協会の研究発表集会に分散されているのが現状である。これらの組織の協力によって、この分野に関する合同会議を年1～2回程度開き、その時点における重要な研究成果がもれなく発表されれば、適切な評価が行われると共に、わが国における研究動向を概観することができて有意義であろう。研究開発のピークを示すだけでなく、学問分野としてのレーザー工学あるいは光・量子エレクトロニクスの確立を図ることも重要であると思われる。